

体育実技履修学生の自己効力感および社会的スキルの変化に関する基礎的検討(その2) (第63回日本体育学会発表)

村山光義, 加藤大仁, 須田芳正, 村松憲, 野口和行 (慶應義塾大学体育研究所)

目的: 近年, 大学教育に学生の成長に寄与するという視点が求められている。本研究は, 大学体育実技実施の効果に関して, 社会的スキルの向上を意図し体育実技内にコミュニケーションの促進をはかるメニューを加え, 上記スコアの変化について基礎的検討を行った。

方法: 1. 調査用紙

個人プロフィール(学年, 性別, 生年月日, これまでの身体活動の有無, 体育実技履修コマ数), 社会的スキルテスト, 一般性自己効力感テスト含む構成とした。
社会的スキルテストは, 菊池(2007)によって開発されたKiSS-18を用い, 大学生の男女別で集計を行った。自己効力感は一時的セルフ・エフィカシー尺度(General Self Efficacy Scale: 以下GSES)を用い, 学生(男女一緒)の評価表にあわせて男女の区別なく集計を行った。

2. 調査時期及び方法

本研究は慶應義塾大学総合研究推進機構研究倫理委員会倫理審査委員会の承認を受け実施された。調査は平成23年度の春学期の4月下旬(春学期の履修登録がほぼ確定した時期)および6月下旬から7月上旬(春学期の最終授業付近)の2回実施した。授業時間内に配布・回答してもらった。調査を実施した授業のうち, 筆者らの担当するクラス(サッカー, フットサル, バスケットボール, テニス)において, 社会的スキル向上を目指した授業プログラムを実施した。これらのクラスをプログラム群とし, それ以外のクラスを一般群として比較することとした。

3. 分析

Kiss-18, GSESそれぞれのデータについて, プログラム群と一般群でその変化を比較した。データの基礎的検討から, Kiss-18, GSESの得点には年齢および学年による違いがあり, 21歳以上(図1-1~1-3:最下部に表示), 第3学年以上の者はあらかじめ得点が高い傾向にあった。そこで, 18-20歳以下の者を分析対象者とした。

4. 社会的スキル向上を目指した授業プログラム

プログラム群では, コミュニケーションづくりやグループワークを意識した内容として, 初期:アイズブレイクを取り入れたウォーミングアップ, 中盤:グループワークを課題とした練習, 終盤:クラス全体の相互作用(リーグ戦・固定チーム)を利用したプログラム, 取り入れた。主な内容は以下の表のようであった。

	バスケット	テニス	サッカー・フットサル
初期	・ペアになってのパス, ドリブル, シュートの基本練習 ・ツアラインでのパス練習各種 ・ツアラインでのシュート練習各種	・4人1組で様々なテーマでディスカッション ・2人1組で, 1人が後ろからボールを出してもう1人が1バウンドさせてから打つ, お互いに感想を伝える ・2人1組で, 1人がボール投げとサーブを行い, もう1人がその様子を観察し, お互いに感想を伝える	・パス&コントロール ・パス&ムーブ ・ドリブルシュート ・試合
中盤	・ウィングワーク/ポストワーク ・ギブ&ゴー/スクリーン・アウェー等, パスした後のポジション取りのためのドリル各種 ・ドリブルへのあわせ: 2対0/2対1	・2人1組で, 1人が後ろからボールを出してもう1人が1バウンドさせてから打つ, お互いに感想を伝える ・2人1組で, 1人がボール投げとサーブを行い, もう1人がその様子を観察し, お互いに感想を伝える ・2人1組で, ボレー対ボレーを行う, 相手がぎりぎり返せるくらいのスピードを出すようにする	・ポストシュート ・スイッチからのシュート ・ゴール前の2対1, 3対2 ・試合(リーグ戦形式)
終盤	・スクリーンプレー ・カットスロー	・ダブルスのゲームを行い, 終了時に自分自身のプレーについて感じたことを他の3人に伝える ・ダブルスのゲームを行い, 終了時に他の3人のプレーについて感じたことを伝える	・セットプレー ・試合(リーグ戦形式)

結果及び考察:

Kiss-18男子・女子, GSESの1回目の得点は, 両群間に有意差が認められず, 1回目の時点で履修者の各スコアは同程度であった(図2-1~2-3)。しかしKiss-18男子では, プログラム群の1回目に対し2回目が1%水準で有意に向上した。また, プログラム群1回目と一般群2回目にも1%水準で有意差が認められた。一般群も2回目に向上を示しているが, 有意差は示されなかった(図2-1)。

社会的スキル向上を意図した介入により効果が認められた。

Kiss-18女子では, 一般群のみ, 2回目が1回目に対して5%水準で有意に向上した(図2-2)に示した。

GSESは, 男子のKiss-18同様に, プログラム群の1回目と2回目, プログラム群1回目と一般群2回目に1%水準で有意な向上が示された(図2-3)。Kiss-18とGSESには高い相関が認められる(加藤ら, 2011)。社会的スキル向上を意図した介入によりGSESも向上の可能性が示された。

1回目得点と2回目増加得点の関係は1回目低得点の者ほど増加が大きく, プログラム群のKiss-18男子とGSES, 一般群のKiss-18女子とGSESにおいて統計的に有意に右下がりである結果となった。(図3-1~3-3) 1回目得点下位・上位25%の者の2回目増加得点はプログラム群・下位群の方が高かった(図4)。

1回目の低得点者ほど増加得点が高い傾向が強い, プログラムの介入は特に予め得点の低いものに効果的である可能性が考えられる。

社会的スキル: Kiss-18

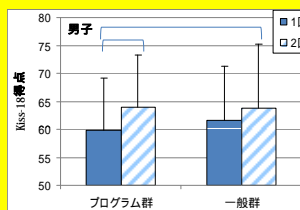


図2-1 Kiss-18(男子)の1回目と2回目の得点比較
実線: $P < 0.01$

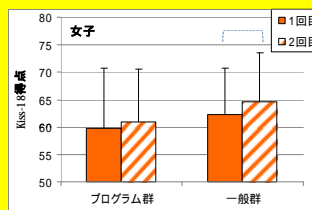


図2-2 Kiss-18(女子)の1回目と2回目の得点比較
点線: $P < 0.05$

自己効力感: GSES

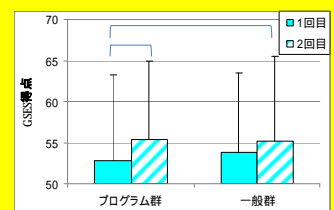


図2-3 GSESの1回目と2回目の得点比較
実線: $P < 0.01$

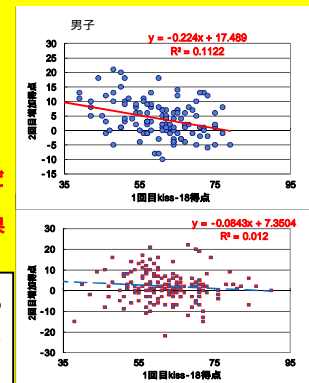


図3-1 Kiss-18(男子)の1回目に対する得点の増減
上段: プログラム群, 下段: 一般群

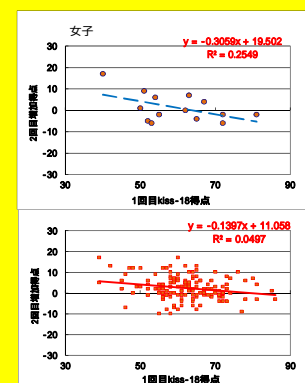


図3-2 Kiss-18(女子)の1回目に対する得点の増減
上段: プログラム群, 下段: 一般群

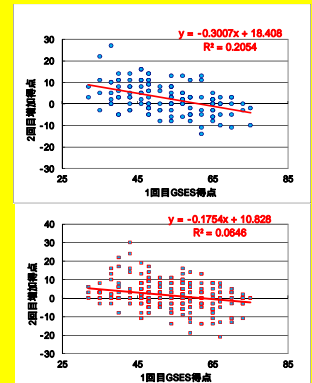


図3-3 GSESの1回目に対する得点の増減
上段: プログラム群, 下段: 一般群

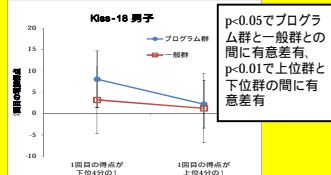


図4 Kiss-18(男子)の1回目得点下位4分の1群と, 上位4分の1群および, プログラム群と一般群との間の比較

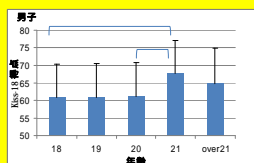


図1-1 Kiss-18(男子)の年齢別得点(1回目)
実線: $P < 0.01$

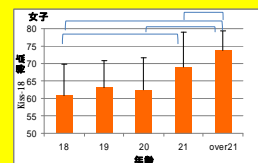


図1-2 Kiss-18(女子)の年齢別得点(1回目)
実線: $P < 0.01$

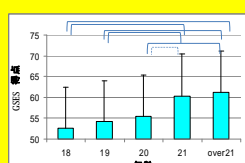


図1-3 GSESの年齢別得点(春学期)
点線: $P < 0.05$, 実線: $P < 0.01$

まとめ: 社会的スキル向上を目指した授業プログラムの実施は男子のKiss-18, GSESにおいて群内の有意な得点増加を導いた。この増加には1回目の低得点者への効果が大きかったことが要因の1つと考えられた。

今回の調査は, 体育実技が学生のメンタルヘルスの維持や, 積極的な社会参加に寄与できる可能性を強めるとともに, 授業内容の工夫によりその効果をより高められることを示唆する。

文献: 菊池幸夫編著(2007) 社会的スキルを測る: KiSS-18ハンドブック, 川島書店
坂野雄二・東條光彦(1986) 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み, 行動療法研究, 12, 73-82
加藤大仁ほか(2011) 慶應義塾大学体育研究所紀要, 第50巻, 9-22